

武者小路實篤全集

第八卷



第八卷

武者小路實篤全集 第八卷

一九八九年二月二〇日 初版第一刷発行

著者——武者小路實篤

発行者——相賀徹夫

発行所——小学館

一〇一〇一 東京都千代田区一ツ橋 丁目一 番一 号

振替 東京八一〇〇番

電話 編集 〇三—三三〇—五二三四

業務 〇三—三三〇—五三三三

販売 〇三—三三〇—五七三九

印刷・製本——大日本印刷株式会社

用紙——三菱製紙株式会社

定価=6800円

Printed in Japan ISBN 4-09-656008-1
© Mushakōji Sanoemukai 1989

*著者換印は省略いたしました。 *選本には十分注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。 *本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

目 次

若き人々……………一

序

若き人々……………三

母と子……………一九五

棘まで美し……………四〇一

自序

棘まで美し……………四〇四

哲学者ラメーの死……………四七七

「大調和」前後 (一)……………四八七

「白樺」……………四八九

「六号雑誌」(大正八年一月号) 、「六号雑誌」(大正十二年八月号)

「新しき村」……………五四二

「会員諸兄に」(大正七年七月号) 、「雑感」(大正十二年一・二・三合併号)

「生長する星の群」……………六二七

「生長する星の群」発刊に就て（大正一〇年創刊号）ゝ「六号雑誌」（大正一二年
二月号）

「人間生活」……………六五六

「一九二四年を迎へるにさいし」（大正一三年一月号）ゝ「新しき村より」（大正一三
年一〇・一一月合併号）

「不二」……………六六八

「六号雑誌」（大正一三年四月号）ゝ「六号雑誌」（大正一五年四月号）

「ひ 新しき村」……………六九八

「編輯雑誌」（大正一五年四月号）ゝ「川越の土地について」（昭和四年八月号）

解 説・解 題……………紅野敏郎……………七三一

若き人々



『若き人々』表紙。装幀：岸田劉生

序

この小説は万事目出たしではつてゐる。たまにはさう云ふ物語りもあつていゝと思つてゐる。僕の母はこの頃の小説の終りが悲劇になりがちなのをいつもこぼしてゐる。

それでをはりが目出たいものもあつていゝと思ふ。(他にも沢山あるかも知れないが) その方がよんでも氣持がいゝし、かいても氣持がいゝ。

主人公を出来るだけ幸福にしたいと思ふのは作者の人情である。それが事件や運命の具合でいくら幸福にたくも幸福に出来ない場合がある。

この小説の場合は運よく目出たく出来た。いろ／＼の男の助けがあつて。

人間は皆、愛しあひ助けあひ本音をはきあうことが出来れば幸福になれる場合が多いと思ふ。

しかしどうでもいゝ。この本をよろこんでよんでくれる人が多いことをのぞんでゐる。

二六、一一、二六

若き人々

一

中尾広太郎は若き創作家である。

知つてゐる人は知つてゐるが、知らない人は知らない。それはきまり切つたことであるが、たゞ知つてゐる人が甚だ少くつて、知らない人が甚だ多いのである。しかしだから中尾広太郎はへぼ作家であるとは云へない。

彼は少数の人からは随分望みをおかれてゐるが、その少数の人は多く青年で、まだ何にもわからない連中である。さう云ふ人になぜ中尾広太郎の小説がいゝのかと聞くと、中尾広太郎の小説をよむと元氣になるからと云ふ。

だから中尾広太郎と云へば若い人間を元氣にさせる、甚だ有名でない作家と云ふことになる。彼は同人雑誌を仲間と出してゐるだけで、原稿を他の雑誌からたのまれたことはない。又自分からのせてくれとたのんだこともない。

彼の家は金持ではなかつたが、どうにかくらしつてゆけたからである。彼はくらしに困つたら何をするかわからない。彼は金をとれる仕事でしたい仕事はあまりない。彼は古本屋ならやつて見てもいゝ

なぞと考へたこともあるが、それも氣まぐれにすぎない。そして第一金の工面も出来ない。しかし彼はその方はどうにか出来ると思つたが、古本屋の店番をさせたく思つた女があつたのだが、その女は何処かへふいに行つてしまつた。

それは彼の近処に住んでゐた女だが、彼が一寸病氣してゐる間に何処かへ引越してしまつた。甚だ不都合な女である。彼はその後半年あまりたつがその女に逢はない。

その女を彼は自分の妻にして、その女が店にすわると、きつとあいがいゝから本が売れるだらうと云ふのである。あまりいゝ考へではないが、彼はその女を人々に見せて自慢したいらしい。

彼は十四五の時、ある本屋のお上さんがすぎだつたことがある。

それでその女にそのお上さんの真似をさしたかつたのかも知れない。本屋をやらうと一寸考へたのも、その女を店に坐らしたかつたのにすぎないのかも知れない。彼はあまり新しい男でもなかつたからその女を女優にしたいなぞとは考へなかつた。彼は又その女に美しい着物なぞを着せようなぞとは考へない。彼はその女のはげちよりの寝まき姿を見たことがあるが、その時一番可愛いく思つた。

まあそんな話はそれでよしとして、彼は同人雑誌を出してゐる人で、まだ世間からは認められない、失恋小説家である。

齡は二十六である。

之から一あばれしたいと云ふ齡である。何かするぞ、そんな氣の強い所が彼のとり柄である。それで青年たちがよろこぶのである。

それ等の人間が集まると、

「今に何かするぞ」

と云ふのである。何をするか、それは彼等自身はつきりしてはゐないのである。たゞ「何かするぞ」と云ふ氣が強いのである。

中尾広太郎に云はすと、傑作をかいで見せると云ふのである。しかし傑作がかかるかどうか自分にもわからないのである。たゞ書きたいと云ふ氣が強いのである。

しかし彼の本性をもつとよく見ぬくものは彼は小説家で一生を終る人間ではない。彼は政治家にゆくか、社会改良家にでもなるのが適してゐると云ふのである。しかし彼はそんなことは以前は考へたこともあるが、今は考へない。今の彼はいゝものさへかければいゝのである。しかし彼は純芸術肌の作物よりは、もう少し社会的に働かせるものを愛してゐるのは事実である。しかし彼はむしろそれを耻づべきことのやうに考へてゐる。少くも氣がちると仕事が出来なくなりはいないかと思つてゐる。

其処で彼はいつも、小説をかくことを心がけてゐるが、彼は滅多に小説はかけないで、感想や、詩のやうなものを多くかいてゐた。

その方が彼には直接であつた。

中尾広太郎の説明はその位にしておく。

二

中尾広太郎は今日は一日家に居て、机に向つたり、室の内を歩き廻つたりしてゐた。彼は今朝から何枚かき損ひしたかわからなかつた。彼は今難関にぶつかつて、それを切りぬけなければならなかつたが、彼にはその力がなかつた。それでいろいろに書き方をかへたり、筋をかへたりしたが、力の入れ所がわからず、かくに従つて力ぬけして来て、どうしても思ふ処に入れなかつた。

彼はかう云ふ時には何をしても駄目だと云ふことは知つてゐたが、何処かで又不意に道が開けてはくれないかと机にしがみついて居た。

段々気がおちつかなくなり、いら／＼して来た、それで彼は思ひ切つて外に出た。

もうすべては秋になつてゐた。彼は何処と云ふあてもなく歩き出した。友達の家へ行かうかと思つたが、もうぢき晩飯時なので、行くのも気がひけた。それで神田へ行つて、本屋の前に立つては見たが、墓口には二三銭きり入つてゐなかつたので、本屋に入る気もせず、又歩き出した。

彼は五十銭以上金をもつてゐると、きつと何か本を買つてくる。そして電車にもものれずに一里もある処から歩いて帰ることはよくあつた。彼は身体は丈夫とは云へないが、歩くことだけは一人前だつた。そして墓口に一円以上も入つてゐる時は墓口を大事にしまつてゐたが、金がなくなるに従つて墓口のおき場がわからなくなり、毎月月初めに父から小遣ひをきまつてもらう時分には、いつも墓口をさがすのに骨が折れた。もらへば二三日の内に本を買ひに行くのが常で、すぐあるだけ本にしてしまふ。そしてその後は殆んど一文なしですましてゐた。

彼は足に任せて方々歩きまはつた。彼はまだ小説のことを考へてゐたが、他のこともきれ／＼に考へて居た。

ある角をまがつて、一寸来た時に、彼は偶然、半年以上逢はなかつた本屋の店に坐らしたかつた女に逢つた。

二人は顔を逢はせた時、彼は何気なく頭をさげた。すると女も頭をさげた。二人は近所にゐた時には、あいさつしたことも、話したこともなかつた。今こゝで不意に逢つたために思はず二人はお辞儀したのだつた。しかしそれだけで二人はわかれてしまつた。彼は二三町夢中で歩いて来て、ふと、彼女は今何処にゐるのか知りたいと思つた。この機会をのがしてはもう彼女には逢へないと思つた。

其処で彼はあわててひき返した、そして角まで駆けて来て見たが、彼はその女の姿を見つけることは出来なかつた。彼は氣違ひのやうに、あたりの店をのぞき、露路をのぞき、横町をのぞいて見たが、女の姿は見えなかつた。彼は泣きたい気がした。

あんまり不意に逢つたので、おどろいてお辞儀した。それは大出来だつたが、夢中になつて喜びすぎて、一番大事な処で手ぬかりをしてしまつた。彼はもうその女に逢ふ時はあるとは思へなかつた。

彼は今更にその女の美しく可憐なのにおどろいたが、彼はどうにも仕方がなかつた。あきらめ兼ねて、其処等をうろつき廻つたが、方々に明りがつき出し、夜があわたとしく近づいて来たが、女は姿を見せなかつた。

彼はやむを得ず、とり返しをつかないやうな氣になりながら歸つて来た。帰ると、今さつき、山田啓八が来たことを聞いた。

「なぜ待たしておかなかつたのです」

と彼は母に云つたが、母は

「お待ち下さい、もうすぐ帰りますと云つたが、之から上岡の処へ行く約束がありますから又来ます。よかつたら中尾君に上岡の処へ来て下さいと云つてお歸りになつた」と云つた。

「さうですか。それではすぐ御飯にして下さい」

中尾はあわて、晩飯を食つて上岡の処へ出かけた。彼はさつき神田の横町であつた、女たか子の方が頭からはなれなかつた。

「お辞儀してくれた。その時の表情の可愛らしさ。たしかに俺を嫌つてはゐない。何処にゐるか知らないが、俺さへ有名になれば、俺の本を通して、あいつにラブレターを送ることが出来る。よんでくれないやうな奴なら用がない」

そんなことを考へたが、しかしそれはつけ元氣にすぎなかつた。

「あの女は本なんかよみさうもない女だな！」と一方思ふとなほがつかりした。

三

上岡五六の家は牛込見附のすぐちかくにあつた。彼等の内での年長者であつて、画がすきで、画をかいてゐた。詩もつくつた。中尾の詩は時々感想のやうなことがあつたが、上岡は詩らしい詩をかき、詩人の一人として通用してゐた。世間でも、上岡が詩人だと云ふことは上岡の詩をよまない男でも知つてゐた。

上岡の処には山田の外に、寺元玄一が来てゐた。それで彼等の仲間は一通りそろつたわけだ。

中尾は山田と一番仲がよかつた。しかし山田と上岡とは遊び友達だつたが、金のない中尾と、一番齢の若い寺元とは道楽をしたことはなかつた。其処で話によつては、山田と上岡とが話があひ、中尾と寺元とが話があつたが、四人は仲はよかつた。

四人は相変わらず気焰を上げてゐた。文壇の話も多く出たが、彼等と逢ふと二三の例外はあるが、大概頭からやつつけられた。中尾は一番、今の文壇の大家連中に反感をもつてゐた。彼のかくものは凡そ大家連中とは共通点のないものだつた。それに彼はまだまだづかつた。

又経験範囲がせまく、材料の範囲がきまつてゐた。

彼等はトルストイ、ドストエウスキー、バルザック、ストリントベルヒ、などを一番ほめてゐた。

日本の文壇のものをよむと文学は男子の仕事ではないやうな気がする。西洋の一流の人のものをよむと男子の仕事として耻かしくな

いどころか、実に大きな仕事と思ふ。

中尾はよくそんなことを考へた。自分は技巧では叶はない。だが真剣ではまけない。

中尾は十時頃山田と上岡の家を出た。

中尾は早速、たか子に逢つたこと、そしてお辞儀したこと、それからどうしても姿が見えなくなつたことを話した。そしてどうかしてもう一度逢ひたいものと思つてゐると話した。山田は同情して、前に居た家へ行つて引越しさきをきいたらどうかと云つた。

しかし中尾はどうもその氣になれなかつた。

「さうだ学校へ行つて聞けばわかるだらう」

「しかし今学校には行つてゐないのだからね」

「小学校ぢやわからないかね」

「わかるまい。運があれば又逢へるやうに思ふよ」

中尾はそんなことを云つて山田とわかれた。

四

その後中尾は時々たか子に逢つた処に出かけて見たが、柳の下にいつもどぜうが居ないと云ふのは本当だつた。彼は自分をあざけりながら帰つて来た。

立派な仕事をするより他仕方がない。彼は次ぎのやうな詩を雑誌に出した。

「某月某日某時半年ぶりて

あなたにあつて

おじぎした。

夢中になつて

三町歩いて

ふりかへつたら

あなたはもう其処に居なかつた。

私はあわててあなたをさがした。

さがしはした、

だがあなたは

何処にも見つからなかつた。

あなたに逢はしてくれたものよ

あなたの手紙をもつて来てくれ、

あなたの居処を教へてくれ」

勿論、この詩はたか子の目にはふれなかつたらしい。彼の心待ちしてゐた手紙は遂に彼の処に來なかつた。

しかし彼は毎日、心待ちしてゐた。

彼はすぐ失望するやうな、なまやさしい男ではなかつた。

彼はよく散歩して、彼女に似た後ろ姿を見たが、急いでおひこしで見ると、いつもまるで似てゐない女なので、がっかりした。しかし彼はまだ／＼望みを置いてゐた。

彼はその後、二つ三つ小説をかいで発表した。愛読者から彼は賞讃の手紙はうけとつたが、世間からは認められなかつた。しかし彼は少しもがっかりしなかつた。

「今に見ろ」と思つた。

五

ある日彼が机に向つてゐると、其処に父が入つて來た。

「勉強か」

「いゝえ、かまひません」

「お前はいつまで独身でゐるつもりなのだ」

「金のとれるやうになるまでです」

「しかしいゝ女が居たら、約束だけでもしておいた方がいゝだらう」

「いゝ女もゐませんから」

「本當にゐないのか」

「ゐないと云ふわけでもありませんが、何処に住んでゐるか知らないのです」

「呑気な奴だな」

「いえ、呑気でもないのです」

「わからないのか、調べても」

「こないだ往來で一度あつたのですが、お辭儀してわかれてしまつたのです」

「その女でなければならぬのか」

「まあ、今の所ではさう思つてゐます」

「さうか、俺の友達の娘にこんなのがあつたが、よかつたらもらつてくれと云ふのだが、俺もいゝと思ふのだが、駄目かね」

父は息子に一つの写真をわたした。

「どうだ。中々可愛いゝ顔してゐるだらう」

「どうも、僕のほしがつてゐる女の方が之より綺麗です」

「それでも居所がわからなくつては困るだらう」

「そんな雲をつかむやうな話で、この女を斷るのは考へものと思ふがね」

「それでも僕はまだ結婚したくないのです」

「その女の家は金持か」

「そんなことはありません」

「しやれものぢやないだらうね」

「そんなことはありません」

「病身ぢや困るよ」

「大丈夫です」

「だが又あへる望があるのか」

「どうもそれがわからないのです」

「それなら之は断つていゝね」

「えゝ、断つて下さい」

お父さんはそのまゝ室を出た。すると今度はお母さんが入つて来た。

「お前は結婚したい女があるのかい」

「えゝ」

「居処がわからないのだつて本当かい」

「えゝ」

「それで今度の話をことわるのは私は考へものだと思ふがね。あんないゝ娘さんはめつたにゐないからね、それに家のつりあひもいゝし」

「僕は出来るだけ独身でゐたいのですから」

「本当に可笑しな子だね」

母も愛想をつかして出て行つた。彼はほゝゑんでゐた。何処かで惜しい氣もしないではなかつた。だが勇ましい氣もした。あの女はきつとよろこんでくれるだらう。

しかし一生、もう逢へないかも知れない。

だが逢へないともぎまらない。

六

中尾広太郎は山田の家に行つた。

二人は結婚の話をしてゐた。

「結婚はしないではゐられない時までにはしないが」と思ふ。愛してしまへば別だが、愛もしないのに結婚するのは愚だと思ふね。自分に仕事がなければ仕方がないが」

中尾はそんなことを云つてゐた。

「僕もさう云ふのだ。しかし僕の父は結婚は愛とは又別なものだと云ふのだね。誰だつて若い男は一寸美しい女でも見るとすぐ恋してしまふ。そしてあの女でなくつてはと云ふ。だが広く深くつきあつて見たら、その女よりずつといゝ女がいくらでもあるかも知れない。あまり狭い範圍で見つけた女を唯一の女のやうに思ふのはどう云ふものかね、と父は云ふのだ。僕はそれも一理があると思ふよ。僕達はおつと女と交際する機会がないと、自分の想像にだまされやすい」

「それはさう云ふこともあり得ないことはない。しかしそれは愛する迄の話だね。本当に愛してしまへば、もう他の女に比較する余地はないね」

「僕はさうと許りは思はない」山田は云つた。「僕は十八の時から二十迄、ある女を私に恋したことがあつたね。僕はその女と結婚したいと思つたが、その女の性質と自分とが、合はないことは氣がついてゐた。だから僕は安心して心をうちあげられなかつた。随分づらかつたが、思ひ切るのが本當と思つたね。尤も今になつて考へると、その女は僕の妻になれば、なるでよかつたかも知れない。し

かしどんなに愛してゐても批判する力を失ふことはないと思ふね」
 「さうかね。相手によるのかも知れないね。僕の場合は、相手の性質が自分にびつたりしてゐると思ふね。随分質素な家に育つたらしい。そしてへんに人をたよるやうな性質が見える。僕はあふたびにその女が自分にたよつてゐるやうに見えるね。僕は自分を信じてたよつてくれるものを実にのぞんでゐる。僕はあの女なら結婚してもまぢがひがあるとは思はないね。ぢみで、おちついて、そして愛嬌がある」

「しかしいくら君の理想的な女にしろ、居所がわからなくつては困るぢやないか」

「しかしその内不意に逢ふと思ふのだよ」

「それがあてになるかね」

「あてにはならないさ。だが其処が面白くもある」

七

山田にとつてはそんな話は少しも面白くなかつた。上岡の処へ山田は出かけて、

「今日は中尾が来て、彼女イズムにあてられたよ。女を知らない男にあつては叶はない。恋愛は神聖で、そして神秘なのだからね。神が逢はしてくれ、こんなにまで愛させてくれたのだから、夫婦にさせてくれるだらう、それが神様の義務だと云ふのだからたまらない。しかしさう思へる内が、花でもある」

二人は笑つた。

「一体君は中尾がその女に逢ふと思ふか、逢はないと思ふか」

「それはわからないね。だが逢はない方が本当だらう。しかしどん

な処で逢はないとも限らない」

「まるで昔の讐討だね。君が神様だつたら逢はしてやるかね」

「まあ、逢はしてやつてもいいね。一寸よろこばしてやつてもいいからね」

「君が小説をかいたらどうする」

「それは逢はさないね。逢はすと通俗になるね」

「しかし逢はさなかつたら小説にならないだらう」

「君がかげば逢はせるか」

「それは逢はせるね」

「それで目出し、目出ししか」

「それは逢はしはするが、結婚はささないね。逢つた時にはもうその女は細君になつてゐる」

「どうもそれも少し通俗だね。しかし書きやう一つでどうにでもなるね」

「二人は結婚した方が仕合せかね」

「一時は仕合せだね。そのさきは当人を知らないのだから仕方がない」

「一体恋人同志は結婚する方が仕合せか、しない方が仕合せかわからないね。したらそれはダンセ二ーの『忘れたシルクハット』ぢやないが詩は死ぬね」

「詩が死ぬ所が又面白いのぢやないかね。性慾なんかだつてさうだ。始めはどんなことしても満足出来ないやうに見えて、満足してしまふと存外他愛ないものだ」

「だがあの身体がとけてゆくやうな処に、死の神秘がある」

「要するに人間は、あやつられてゐる人形で、そのあやつられ方の運のいゝものが仕合せなのだね。僕達は性慾をわなとは思はないが、

自然のぬけめのないのには感心していゝのか、反感をもつていゝのか、わからないね。どつちにしても、自然の思ふ通りになるより仕方がない」

「中尾は又歩いてゐるだらう」

「一寸逢はしてやりたいな。あいつの喜ぶ顔が一寸見たいからな」

「だが早速君はあてられるね」

二人は笑つた。

八

山田と上岡がそんな話をしてゐる時、山田の想像通り、中尾は神田の裏通りを歩いてゐた。彼は逢はないことは知りすぎてゐた。しかしもしも逢はないとも限らないと思つた。しかし彼は逢はないで歸りかけた時、自分の愚に腹が立ち、女が、その時間に、彼に逢ひに、彼の逢つた所まで出て来ないことに腹を立てた。もう逢ひに来てやるものかと思つた。

「勉強しよう。勉強しよう。いゝ仕事をするより外に、自分にゆるされたいゝことはない。その他は自分を墮落させる許りだ」

彼は歸つて、よみさしの「カラマゾフ兄弟」をよみ出した。彼は驚嘆しないわけにはゆかなかつた。彼は日記に、

「巨人の足あとに

そと自分の足をつけて見る

その小さゝはどうだ。

赤い顔して

足をひつこめて

さて巨人の足あとを

又見なほす。

小人のわれ

耻を知れ」

彼は自分の性質の單純と、そして自分の内面生活の幼稚で小さいのを耻かしく思ひどうかしたく思ふ。

「自分は何をしても始まらない人間か

だが何をしないでも始まらない。

やれるだけやれ

出来そこなつても

元の木阿弥」

彼は女のことは思ひ切りたく思つた。女のことをすっかり忘れ切つた時、思はぬ処で逢へる。忘れ切らないから逢へないのだ。

そんなことを考へた。

九

彼はその晩家にじつとしてゐられないで散歩に出た。彼は女の人のことは考へないでよさうと思つたが、考へないでよさうと思ふと反つて考へられて来た。そしてますます／＼その女が理想化されて行つた。

彼は美しい女が好きだが、華な女を好まなかつた。彼は淋しい処のある、静かな美しい女を愛した。しかし華な美しい女とつきあつたら、彼は好きになつたであらう。しかし遠くから愛し、又一緒に生活するには、彼は静かな優しい女を愛した。そしてたか子はそんな女だつた。

たか子は背のすらつとした瘦方であつた。そして何処か淋しい表

情をしてゐた。彼は殊にたか子の目を愛した。それはへんに愛くるしかつた。

彼はたか子の姿や、顔がいつにもなく、はつきり頭に浮んで来た。あんないゝ奴はないと思つた。

しかしそんなことは考へないでよさう。どうせもう合ふことはないだらう。女はまるで僕のことと思つてはゐないのだし、冷静に考へて見て、このことはだめにきまつてゐる。たゞ愛してゐるだけで満足が出来ればともかく、結婚したい気だけはなくなしてしまはう。そしてもう逢ひにゆくことなんか断然やめよう。それよりその時間であつた。

自分をうんとよくするより他のことに望みを持つことはやめよう。そして自分を運命に愛される人間にしよう、もう女々しい考へはすて、饒幸をたのむことはよさう。

明日から朝も早く起き、下等なことは考へないやうにしよう。そして自分の頭を出来るだけよくしよう。

彼はそんなことを考へると元氣になれた。

一〇

彼がそんなことを考へてゐる時、彼の家では、よき父と母がこんな会話をしてゐた。

「お父さん、あの子には本当に困つたものですね」

「なにが」

「だつて、往来で逢ふ女なんか好きになつて、それで何処にゐるかも知らない女と結婚したいなんてあんまりですわ」

「其処が面白い処だよ」

「ちつとも面白くありませんわ。本当に見ともない」

「まあ、見ともよくないことはたしかだが、しかしあの位思ひこめるのは、あいつが真面目だからだよ。それにあいつが、好きな女は悪い奴ぢやない」

「お父さんは御存知なの」

「あいつのかくものをよんでゐるからな」

「そんな馬鹿なことをかいてゐるのですか、耻かしくもなく」

「小説家と云ふ仕事は耻かしいなぞと思ふ奴には出来ない仕事だね」

「あれは耻ぢ知らずでもないやうですがね」

「耻のあり場所がちがふのだ」

「それでその女はどんな女ですか」

「そら、お前が三四年前に、正月俺と一緒に夕方、通りに買ひものに行つた時、お前が半けちをおとしたのをひろつてくれた女の子があつたらう」

「えゝありました」

「お前は可愛いゝ娘ですなとあとで云つてゐたろ。あの子だよ」

「えゝ、あの子ですか、それだつてあんまり小さいぢやありませんか」

「でも、もう十六七にはなつてゐるだらう」

「あの子は本当にゝ子でした。さう云へばこの頃見ませんね」

「引越したのだよ」

「さうですか」

「それで広太郎の奴あわててゐるのだ」

「あの子は本当に可愛い子でした。あれからあと私を見るといつもお辞儀しましたよ」